

イシカワシラウオ *Salangichthys ishikawai* WAKIYA et TAKAHASI の生活について

II 漁獲量・漁場について

堀 義彦

最近の茨城県のしらす船曳網漁業の主な対象魚種は、シラス(カタクチイワシ稚魚 *Engraulis japonica* (HOUTTUYN))・コーナゴ(イカナゴ稚魚 *Ammodytes personatus* GIRARD)であり、年によってカスゴ(チダイ稚魚 *Euvynnus japonica* TANAKA)も対象になっている。そして、統計には示されていないが、これら三種のほかにも重要な魚種としてホンジラウオ(イシカワシラウオ *Salangichthys ishikawai* WAKIYA et TAKAHASI)が挙げられる。

ホンジラウオはシラスとともにほぼ周年漁獲され、最も単価の高い魚種であり、稚魚から産卵親魚まで対象となる点でも、他の三種と異なっている。従来、本種に関する報告はいくつかあるが、漁獲量・漁場に関するものは少ない。ここでは、昭和42年から同45年までの標本船報告書を整理した結果を述べる。

本論に入るまえに、標本船(金長丸・朝栄丸・亀栄丸・清進丸・平勝丸)の方々、および、漁況情報・採集などに協力していただいた大洗漁業協同組合・内藤和夫氏、大津漁業協同組合・田沢普氏にお礼申しあげ、また、本報告の校訂をお願いした当水産試験場長・斉藤不二彦氏に感謝いたします。

方 法

月別漁獲量(図-2)は、昭和44年7月から昭和45年6月までの一年間について、大洗漁協の出漁日ごとの船別水揚伝票から算出した。その際、本種はシラスと区別して記載されていないので、Kg当り単価をめやすとした。日別一投網当り漁獲量(図-3)・漁場と漁場別1投網当り漁獲量(図-4、図-5)は標本船の報告結果から算出し、漁場範囲はおよそ5分間隔とした。標本船は大洗漁協所属船2隻と大津漁協所属船2隻であるが、後者は昭和45年のみである。5分間隔ごとの主な沿岸地名を図-1に示した。

結 果

大洗漁協の月別漁獲量をみると(図-2),年間総量は約25トンで,12・1月と3月・9月が多く,4・5月と7・8月が少なかった。なお,当漁業の専従船は大洗地区が最も多く,他の地区では例年秋季の出漁船がほとんどない。また,当漁業は1月21日から2月末日まで禁漁期間となっている。1投網当り漁獲量をみると(図-3),10Kg前後あるいは20Kgの例もみられるが,5Kg前後以下が普通で,時期的には昭和42年が5月中旬,その他の年が6月中旬に漁獲されはじめ,その後季節別でも年別でもあまり差がないようであった。なお,他魚種との混獲はいずれもシラスでコーナゴ・カスゴとの記載例はなく,混獲割合の不明なものは等分して示した。

年別の漁場を見ると(図-4),昭和42年が会瀬周辺から汲上周辺,同43年が大洗周辺から大津周辺,同44・45年が県南端部を除いた全域に分布し,水深では5m以浅で,多くは2m前後であった。漁場別平均漁獲量は10Kg以下が普通であり,各年とも比較的高い値を示した漁場は大洗・久慈・川尻・玉田・鹿島等の各周辺であった。

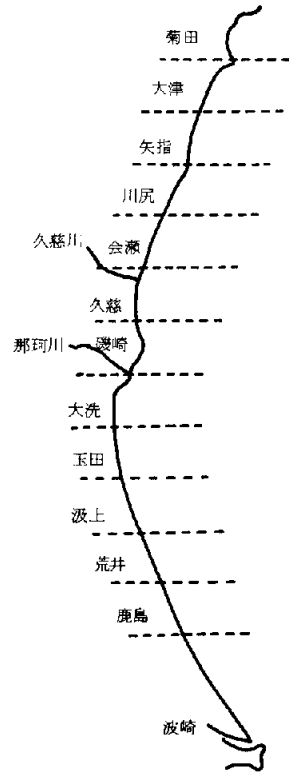


図1 沿岸主要地名

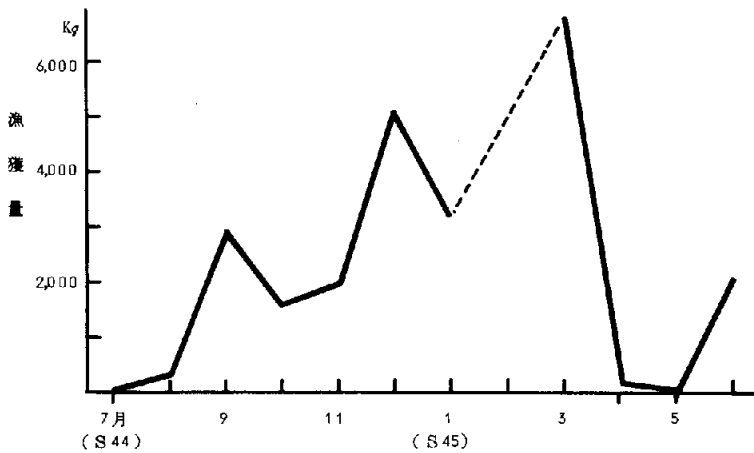


図2 大洗月別漁獲量

漁場とその平均漁獲量を季節別に見ると(図-5)、春季は各年とも大洗と久慈周辺が多く、年によって鹿島周辺・大津周辺にも見られ、夏季は大洗周辺から北側に分布し会瀬・川尻周辺に高い値が見られ、秋季は夏季と同様の分布に加えて南側にも広く分布していた。冬季は、漁獲記録が少ないが、昭和44年の例でみると大洗・久慈周辺であった。

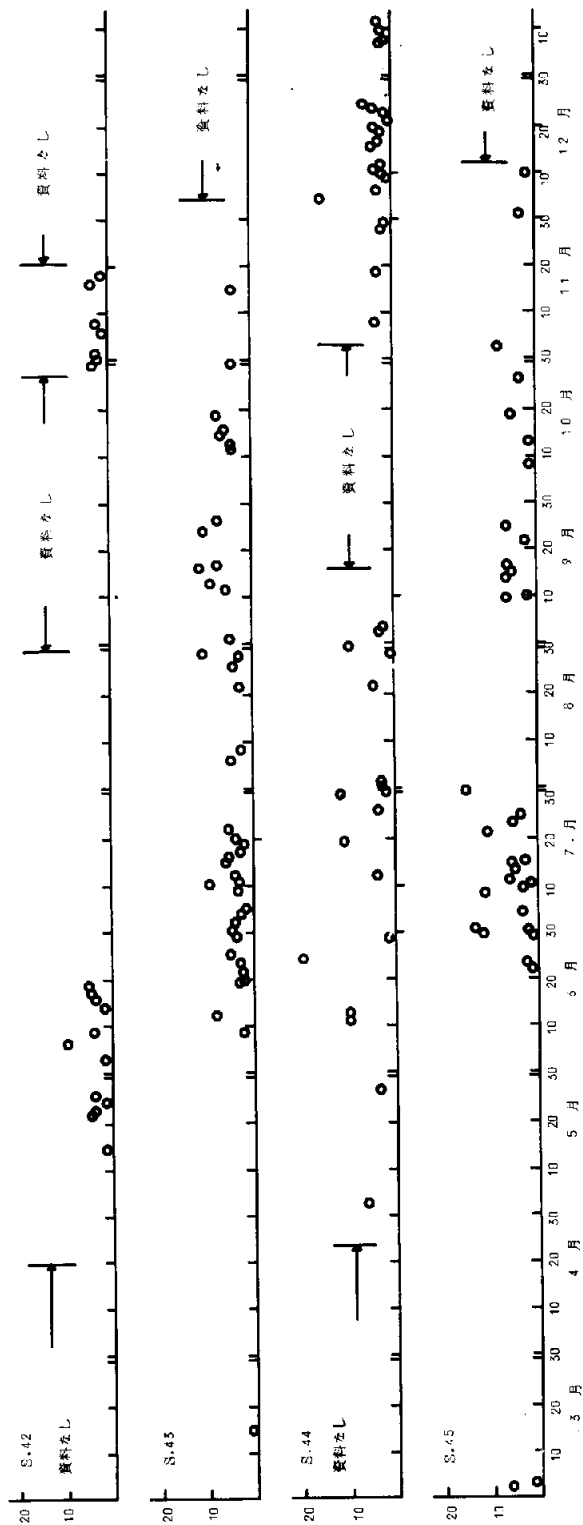


図3 日別1投網当り漁獲量

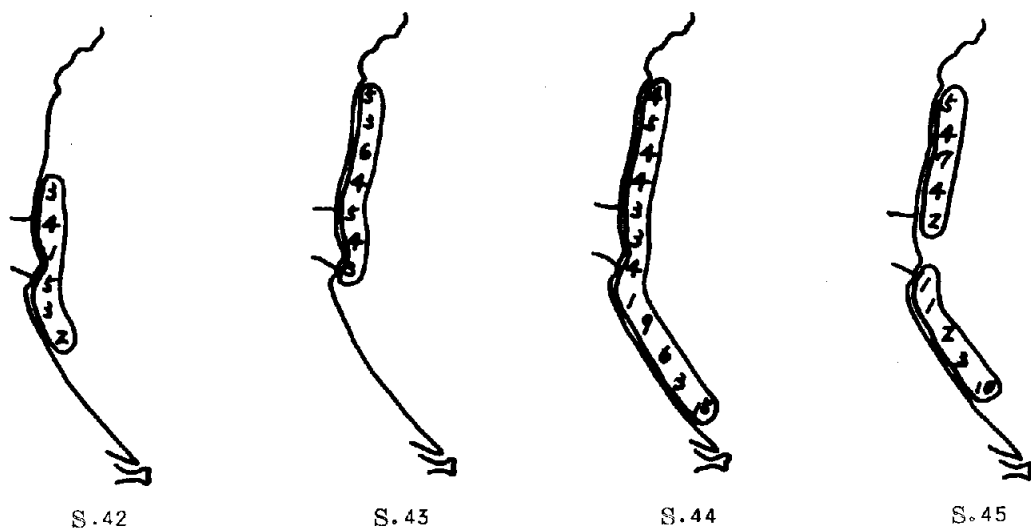


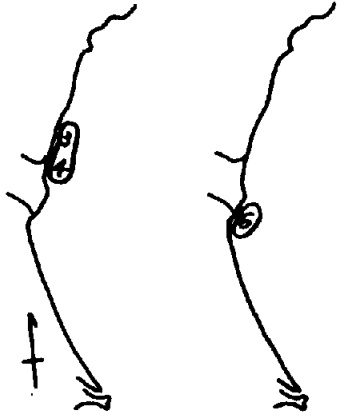
図4 年別漁場と1日1投網当り漁獲量

考 察

シラウオ属魚類にはシラウオ *S. microdon* とイシカワシラウオ *S. ishikawai* の二種が知られているが(松原 '63), 本県沿岸産のものに関する最近の報告(矢口等 '54) 藤本 '54, 堀田 '54, 浅野等 '55, 渡辺等 '67) では, いずれも前者となっている。しかし前報(堀 '69) と, その後の観察結果, およびそれぞれの報告に示されている採集時期・場所・卵径などから, それらはいずれもイシカワシラウオと考えられる。本種の漁獲盛期は従来の報告(藤本 '54, 堀田 '54) によると3月から5月となっているが, 本報告の結果では12月から3月となり, 4・5月は最も少ない時期となる。そして, 4・5月が少ない理由として, 産卵末期であること, ふ化後の稚魚の体長が1cm台で小さく識別が容易でないこと, この期間のシラスの量が多いことなどが挙げられる。年間漁獲量は大洗漁協の1年間だけの結果であり, 年別の推移は明らかでないが, 1投網当り漁獲量の年別の差をみると安定しているように思われる。

分布については図-4をみると年別の差があるような結果が示されているが, これは当漁業の他の魚種も含めた漁況, とくにシラスの年別差による操業範囲のかたよりによるものであり, 本種の分布域は渡辺等(1967)の県南部での漁獲例を加えると沿岸全域となる。また, 浅利等(1967)は福島県沿岸での分布を報告している。本種の移動については産卵期に河口域に集合することが知ら

S.42



4~6月



7~9月



10~12月



1~3月

S.44



4~6月



7~9月



10~12月



1~3月

S.43



S.45

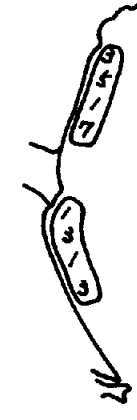


図5 季節別漁場と1日1投網当り漁獲量

れ(堀田1954), 図-5の結果からみても, 低鹹域で分化した稚魚は成長とともに沿岸に広く分布し, 産卵期に再び低鹹域に集合すると推定されるが, 魚体測定資料あるいは冬季の報告が十分でないため, 発育段階別(佐藤1965)に検討することが出来なかった。

本種の漁獲量はシラス・コーナゴに比べてはるかに少ないが, 魚価は最も高く(Kg当り600~1,000円)水揚金額からみるとコーナゴを上まわっていると推定される。しかし, 最近の沿岸環境の悪化は急速であり, 本種のように生まれてから寿命となるまで(1年), 沿岸域のみを生活域としている生物に対する影響は大きいと推察され, 将来その姿を見ることが出来なくなるかも知れない。

要 約

本種の漁期は6月から翌年3月までであり, 盛期は12月から3月である。1投網当り漁獲量は5Kg前後以下で, 漁場は水深2m前後のほぼ全域である。分布を季節的にみると, 夏季と秋季は広く, 春季と冬季は狭くなっていた。

文 献

- 浅野長雄・原田和民・藤本武・丹下 孚 1955: 茨城県海産動物相に関する研究-II, 魚類相について。本誌, S27年度, 87-97
- 浅利龍雄・竹内 啓 1967: シラス・コオナゴ船曳網漁業について-1。福島水試調研資, 661, 1-23
- 藤本 武 1954: シラウオ *Salangichthys microdon* (BLEEKER) の抱卵数について。本誌, S25・26年度, 143-145
- 堀 義彦 1969: イシカワシラウオ *Salangichthys ishikawai* WAKIYA et TAKAHASI の生活について, I. 成長・二次性徴・卵巣・抱卵数について。本誌, S43年度, 41-46
- 堀田秀之・田村 正 1954: シラウオ (*Salangichthys microdon* BLEEKER) の生態について。北大水産研彙, 5(1)41-46
- 松原喜代松 1963: 魚類の形態と検索。石崎書店, 東京。211-213
- 佐藤 栄 1965: 魚の生活の研究における問題点。ミチューリン生物学研究, 1(1)27-50
- 渡辺 徹・市村勇二・小沼洋司 1967: 冬期(1~2月)における機船曳網の漁獲物について。本誌, S41年度, 9-26
- 矢口正直・藤本 武 1954: 「しらす」の組成について。本誌, S25・26年度, 46-48